

## あまのじゃくと精神療法 「甘え」理論と関係の病理

小林隆児 著

弘文堂 (2015) A 5 判 236 頁 本体 3400 円

『あまのじゃくと精神療法』というタイトルを見れば、精神療法を実践する臨床家は著者の言わんとするところがわかるのではないだろうか。「あまのじゃく」という言葉から連想される佇まいには、私たちは面接室の中でたびたび出会っている。語感通りの甘さととげとげしさに、治療者としても、手を差し伸べたいような、逃げ出したいようなアンビヴァレントな気持ちに揺れるものである。

本書を読んで一番強く感じたのは、著者が何かを「確信している」という印象である。そして決意を持ってそれを発信している、そういった気概のようなものを感じた。もちろんどの著作でも著者が「確信していること」や「知っている」ことを述べているのだと思うが、本書に感じるのはもっと強いものだ。本書で著者は、精神的な困難を抱えた子どもに対しては精神療法が必要であり、母親との関係、特に「甘え」を巡る関係を取り扱うことが治療的であるという長年の臨床経験に基づく実感を伝えようとしている。

著者のこういった発信は、本書だけではなく多くの著書で行われている。近年だけでも、『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』『甘えたくても甘えられない——母子関係のゆくえ、発達障碍のいま』など多くの著作がある。本書においてとりわけ特徴的なのは、土居健郎の「甘え」理論を著者の「関係発達臨床」の立場から再考し、臨床論、治療論としての価値を再確認する、その試みを通して精神療法の必要性を伝えていることである。

著者は、長年乳幼児を含む子どもの臨床に携わってきた児童精神科医であり、特に「関係発

達臨床」と称する臨床に、ここ 20 年集中的に取り組んできたとのことである。「関係発達臨床」とは「乳幼児期の子どもたちと主たる養育者である母親との関係に深刻な問題を抱える事例を対象に、何故母子関係が深まらないのか、その要因を探るとともに、その関係修復を試みる」臨床のことである。多くの母子を直接観察し治療する中で、著者は、甘えたそうにしている子どもとそれに気づかない母親、母親が近寄っていくと背を向ける子ども、など、「甘えたくても甘えられない」関係性にとらえられる行動を目の当たりにしてきた。そして母子関係の成立を阻んでいる最大の要因が母子間に見られる「甘え」のアンビヴァレンスにあるとの実感に辿り着いた。その過程で土居の「甘え」理論と、「甘えたくても甘えられない」という現象（甘えのアンビヴァレンス）に注目するようになったという。

はじめに著者は、土居の論文を数本取り上げ、甘え理論を関係性からとらえなおす試みを行っている。読み始めてすぐに、土居の「甘え」理論を臨床上、治療上の文脈で今までほとんど考察したことがないことに気付く。私にとって土居の「甘え」理論の理解は、社会文化論的な「甘えの構造」からほとんど深化していなかったのである。著者は、土居論文の中から「メタファー」、「勘ぐりや勘を働かせるということ」、「同一化と甘え」などを取りあげ、各概念や現象の共通性を論じていく。読み進め、咀嚼していくと、甘え理論と精神療法場面における様々な現象とのつながりが立ち現れてくる。「甘え」は原初的コミュニケーションであり、転移や同一化、解釈をすることやメタファーを

使うことや勤を働かせることなどを包含しているといった感じであろうか。著者はそれら原初的コミュニケーションといえるものを成り立たせる共通項として、「原初的知覚」、特にスターンの「力動感 (vitality affects: 従来, 生氣力動と訳されることが多い)」に注目する。「力動感」は五感に分化する以前の未分化な知覚様式のことであり、著者が関係発達臨床の立場から「甘え」理論を理解する鍵概念である。力動感で各概念を結びつけることで、「甘え」は、否定的ニュアンスでとらえられかねない一般的用語の「甘え」から、原初的コミュニケーションの様々な現象を含む動きのある概念としての「甘え」へと膨らみを持つように感じられる。

続いて著者は、精神療法の場でみられる様々な甘えのアンビヴァレンスを「あまのじゃく」という言葉で定義する。そして、多くの自験例をあげながら、精神療法の中で甘えのアンビヴァレンス、つまり「あまのじゃく」を取り扱うことの治療的意義について論じる。著者の丁寧な観察によりとらえられた甘えのアンビヴァレンスの様相が、実際の治療場面の行動として多数描写されている。ライフステージごとにそれらがどのような現れ方をするのか、と言った切り口からも多くの例が示され、そのバリエーションを追っていくだけでも読みごたえがある。母子間や治療者-患者間、治療空間に漂う甘えのアンビヴァレンスを、著者が「力動感」を通して感じ取り、それらをメタファーを使い解釈として母親や子どもに返した時に、母子に変化が起こる場面はとてもダイナミックである。特に、「あまのじゃく」だった子どもが素直な甘えを示せるようになって問題から抜け出し始めると、決まって母親の方が悪くなる、という筆者の観察は心に落ちる。母子の間で行き場を失いさまよい、「ゆがんだ甘え」となって母子を苦しめていた「甘え」が、戻るべきとこ

ろに戻っていくというイメージがわく。「甘え」を引き戻された母親がデプレッシブになるのは治療プロセスの大きな進展である。「甘え」を自分の人生の中に位置づけ、自分のものとして主体的に引き受けていく母親の作業がそこから始まっていくのであろう。母子間の甘えのアンビヴァレンスを取り扱う精神療法の醍醐味を感じさせる

最後に著者は、エビデンスベースド全盛の現代における精神療法の意義について改めて論じている。精神科医である著者は、実証性の重要性を決して捨て置かない。人の心を扱う臨床や研究におけるエビデンスとは何かについて考え続け、そのうえで精神療法の意義について論じている。発達障碍児の治療に長年携わっている著者が、実証性を重視しながらも精神療法の必要性を強く論じていることは改めて重いメッセージであると感じる。

哲学にも通じる著者によって書かれた本書は、理論的、思索的でもあるが、同時にとても実践的、臨床的である。「甘え」にまつわり精神療法の場面で自分が何をしているのか、転移を生き、そしてそれを解釈することが「甘え」とどう繋がるのか。そういったことを実際の臨床場面に関連させて、ふと思うことが増えた。精神療法を実践する者は、本書を読むことで「甘え」理論を臨床論の観点で見直す機会を得ることができるであろう。

本書を読み終わって表紙を見ると、やはり帯に書かれた一文が違和感を持って目に飛び込んでくる。「甘えられない子どもが危ない!」というセンセーショナルな表現はその単純さゆえアピール力があるが、単純な原因論、責任論を連想させる。そういった単純さに滑り落ちず踏みとどまろうとする本書の姿勢とは合わないように思うのである。